

## 統計から社会の実情を読み取る

### 第18回 日本の女性はどこまでキレイになるのか

**本川 裕** | Honkawa Yutaka  
アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、「統計データはためになる!」(技術評論社、2012年)等。



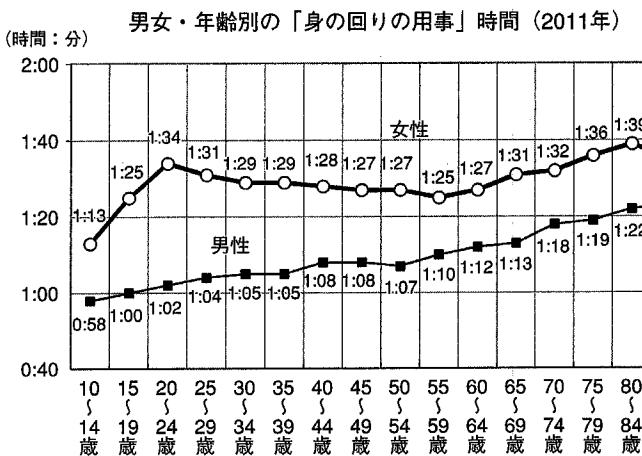
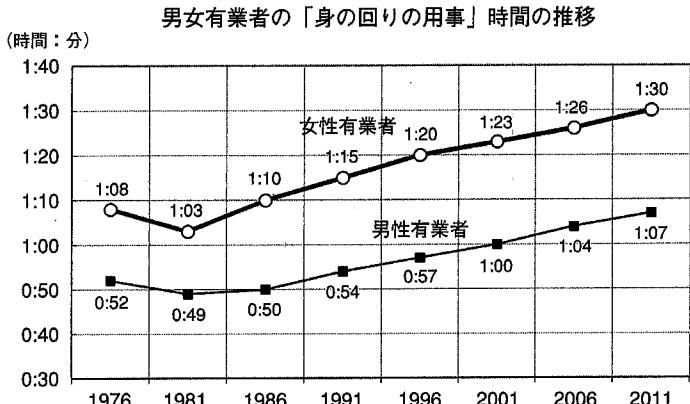
#### 身の回りの用事の時間

日本人の生活時間を調査している社会生活基本調査(総務省統計局)の生活時間について、最新集計が公表された。これについて、前号では日本人全体の長期・短期の動きの特徴を見たが、本号では女性のおしゃれ時間が長くなっている点にスポットを当てて分析する。

前号でもふれたとおり、身の回りの用事(内容は、洗顔、入浴、トイレ、身じたく、着替え、化粧、整髪、ひげそり、理美容室でのパーマ・カット、エステ、巡回入浴サービスを利用した入浴など)は、この35年間で最も長くなった生活時間である。

図1には、「身の回りの用事」時間について、男女有業者の長期推移と最近時点の男女年齢別の構造を示した。長期推移を有業者で追っているのは高齢化の影響を除いた傾向を見るためである。確かに長期的かつ傾向的に所要時間が大きく拡大しており、女性の場合、だいたい1時間から1時

図1 身の回りの用事の生活時間



注) 平日、土日を含んだ週平均の時間。

資料) 総務省統計局「社会生活基本調査」

間半へと 30 分、約 50% の増加となっている。

男女・年齢別の構造では、「身の回りの用事」は、ともに 1 次活動（生理的な活動の時間）に属するものとされる「睡眠」、「食事」と同様、生理的時間であること自体から加齢とともに長くなる傾向が見て取れる。ただし、「睡眠」、「食事」と異なり、女性が男性を大きく上回り、また女性の場合だけ 20 歳代前半で人生前半のピークをもつという特徴がある。こうした点に、単なる生理的な時間ではなく、おしゃれの要素が色濃い時間であることがうかがえる。

「身の回りの用事」の動きが他の生活時間とのぐらいた並行性に動いているかを見るため、8 時点の時系列データから相関係数を求めてみた（表 1）。

女性有業者の相関係数を見ると、小区分より大区分の生活時間と相関度が高いことが注目さ

表 1 「身の回りの用事」との相関係数  
(1976 年から 2011 年までの 8 年次の生活時間)

	男性 有業者	女性 有業者
1 次活動（身の回りの用事を除く）	-0.81	-0.90
睡眠	-0.80	-0.86
食事	-0.52	-0.64
2 次活動	0.00	-0.94
通勤・通学	0.11	0.70
仕事	-0.83	-0.98
学業	0.88	0.96
家事（介護・看護、育児を含む）	0.95	-0.74
買い物	0.95	0.85
3 次活動	0.57	0.96
移動（通勤・通学を除く）	0.84	0.95
テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	-0.46	0.21
休養・くつろぎ	0.49	0.65
学習・自己啓発・研究（学業以外）	-0.46	0.51
趣味・娯楽	0.98	0.93
スポーツ	0.01	0.92
ボランティア活動・社会参加活動	0.40	0.62
交際・付き合い	-0.80	0.28
受診・療養	-0.24	-0.08
その他	0.11	0.54
異性有業者の身の回りの用事	0.97	0.97

資料) 総務省統計局「社会生活基本調査」

れる。個々の自由時間というより自由時間全体をあらわす 3 次活動時間との相関係数が 0.96 と、ほぼパラレルな動きを示している。

1 次活動（身の回りの用事を除く）と 2 次活動との相関係数は、それぞれ -0.90、-0.94 とマイナスで相関度は高い。すなわち、自由時間以外の時間の減少とちょうど対応するかのように増加している。

男性有業者の場合は、買い物や趣味・娯楽といった活動と相関度が高いが、大区分との相関度は高くない。むしろ、女性有業者の身の回りの用事との相関が 0.97 と高いのが自立っている。これは、女性の清潔化（例えば入浴頻度の上昇）に対応して男性の同種の生活時間も追従的に長くなっているのではないかということを推測させる。

このように、身の回りの用事は基本的には生理的なものだが、属性別の時間の違いや時系列的な増分については、おしゃれに割く時間が大きく影響しているといえる。こうした点から、身の回りの用事の時間の国際比較や県民比較を私のサイトでは試みている（「社会実情データ図録」関連図録 [1][2]）。これによれば、日本人女性は世界の中でも最もおしゃれだとみなせる。しかし、誌面も限られているので本号ではむしろ時系列変化に専心を集中させよう。

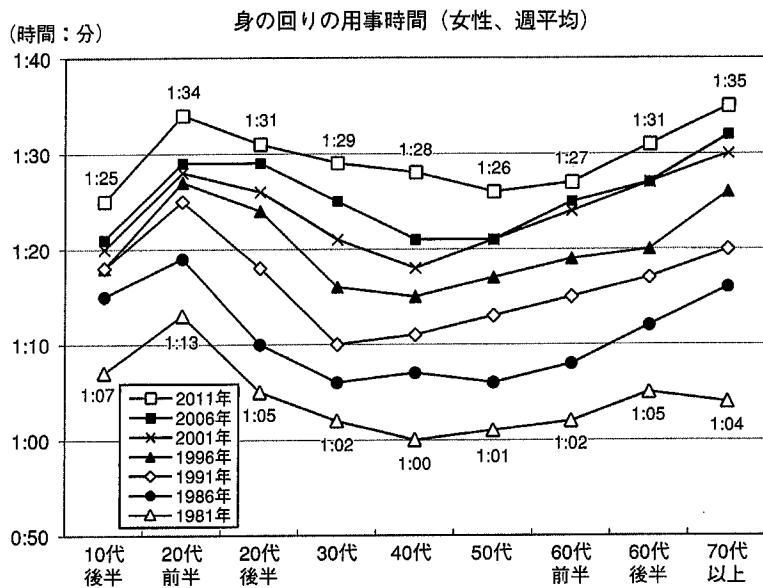
## キレイになる中高年女性

年齢別の女性の身の回りの用事の時間の変化を図 2 に追った。

若い世代、特に 20 代でおしゃれ時間が長く、中年で一度短くなり、60 代以降の高齢者ほど、再度、こちらはおしゃれだけでなく動作に時間がかかることにより、身の回りの用事時間が長くなるという世代構造は変わっていない。

1981 ~ 2011 年の 30 年間の変化の最も大き

図2 世代別おしゃれ時間の変化（女性）



注) 「身の回りの用事」の内容例示は「洗顔 入浴 トイレ 身じたく 着替え 化粧 整髪 ひげそり 理美容室でのパーク・カット エステ」である。2011年の30代～50代、70代以上は5歳刻み値の標本数を使った加重平均である。

資料) 総務省統計局「社会生活基本調査」

いのは、70代以上の31分増であり、これに40代の28分増、30代の27分増が続いている。

5年ごとのテンポについては、バブル景気の時期を含む1986～1991年の伸びが目立っている。2001～2006年には20代後半から40代を除き伸びが止まり、いよいよ限界に達したかに見えたが、2006～2011年には、再度、全年齢におしゃれ時間の大幅な伸びが見られた。

年齢構造的には、2006年までの動きでは、20代の伸びは小さくなる一方で、30代～40代の伸びはなお著しかった。これは、結婚年齢、出産年齢が高年齢化してきていることが影響したと思われる。子育てがはじまると、そうそう自分の身の回りの用事に時間を割いているわけには行かなくなる。出生数が減り、子育ての開始年齢も遅くなつたことが、こうした変化の背景にあると考えられるのである。

ところが最近の2006年から2011年にかけての動きには、より高い年齢層と比較して伸びが小さくなつていた10代後半～20代前半の女性

のおしゃれ時間の伸びの復活、そして、おしゃれ時間の伸びの最前線が30代から40代へシフトという特徴が見られた。後者は、アラフォー、美魔女といった流行語が登場したことと並行した現象であろう。何か、中高年女性と若い女性がおしゃれを張り合っているような感がぬぐえない。

## ボディコンシャスを目指す日本人女性

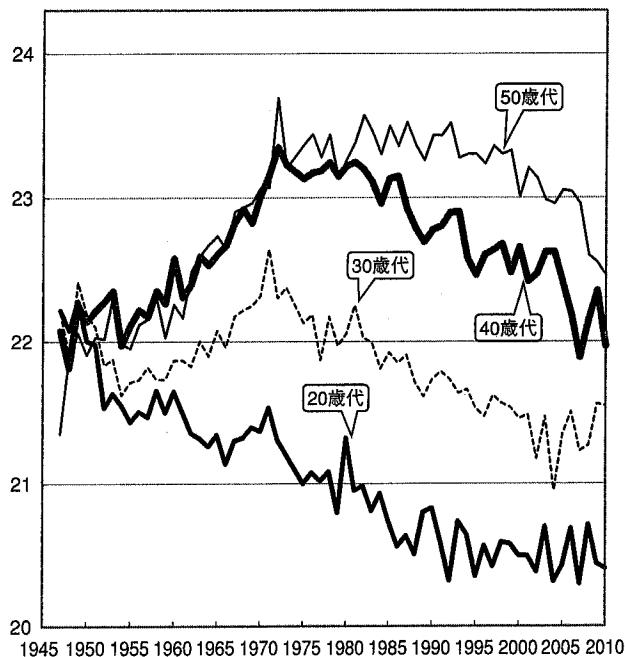
こうした動きは単にファッションに止まるものではない。日本女性は体格の改造に果敢にチャレンジしている。

戦後一貫して20歳代の女性の体格は痩身化傾向をたどっている。すなわち身長が伸びた割には体重は増えなかったのである。痩せか肥満かはBMI指数であらわされるが、各年齢層のBMIの動きを見た図3をながめれば、この間の事情は明解である。

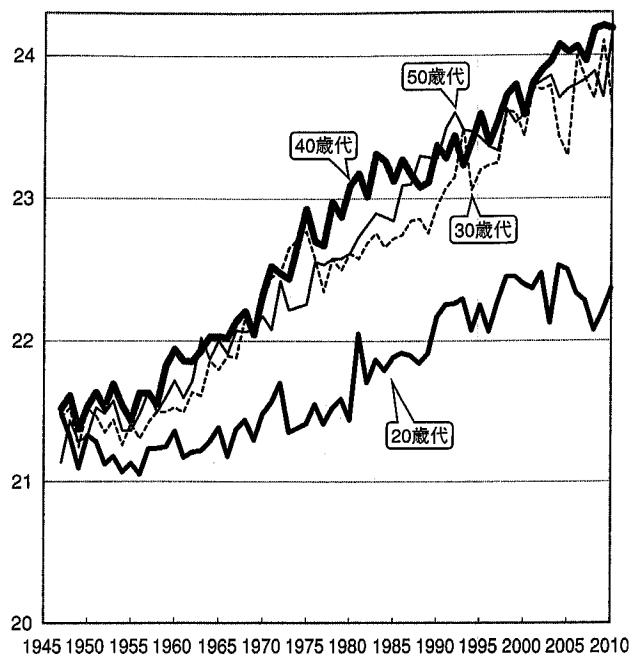
戦争直後は、若年層の方が中高年より体つきがよかった。栄養を若い者に優先的に与えようという国民の考えが反映していたともいえる。戦後、日本人の栄養状態がよくなるにつれ、30歳代以上の女性の体格は改善されていった。一方、若い女性はスタイルの良さを優先させ、どんどん痩せていった。ところが、30歳代女性は1970年代から、40～50歳代は1980年代から、こうした若い女性の動きに追従することになった（若い女性のレベルにまでは到達できないでいるが）。今や気持ち的には全年齢の日本女性が若い女性となつたといえる。こうした動きは、まさに、上で見た身の回りの用事の年齢別の所要時間の伸びの動向と軌を一にしている

図3 日本人の女性体格の変化（1947～2010年）

女性のBMI（体格指数、体重(kg)を身長(m)の2乗で割った値）



(参考) 男性



注) BMI、25以上は「肥満」、18.5以下は「やせ」とされる。ここでは平均体重と平均身長から算出。

1987年までの20～29歳は20～25歳の各歳データ及び26～29歳データによる平均値から計算。

資料) 国民健康・栄養調査(厚生労働省、1974年調査なし)

といえよう。

参考までに図の右半分に男性の動きを示しておいたが、年齢にかかわらず一貫して肥満へ向けての傾向が著しくなっており、これとの対比で、女性の動きの特異性がなおさら目立つが始まっている。

## 日本の女性はどこまでキレイになるのか

1985年当時、30万人だった働く美容師の人数は、最近では45万人、すなわち50%増となっている。これは、ちょうど、女性の身の回りの用事の生活時間の増加にほぼ匹敵している。1960年代のシームレス・ストッキング導入、ミニスカート・ブームにはじまり、バブル期のワンレン、ボディコン、ハイレグ水着、1990年代に入って茶髪の普及・浸透、アニマル柄、ネイルアート、21世紀にはいって、ローライズパンツ、レギンス、ファストファッション、

セレブ・ファッショ、カワイイものブーム、美魔女とファッショの動きは果てしない。しかも、これは一部の特殊階層だけのトレンドではないのだ。生活時間や身体測定の統計データにこれだけ明瞭にあらわれる動きであるからには、国民全体の動きを示すものだといってよい。

最近、道や電車で見かける女性がみんなキレイになったという印象をもつ男性は、私だけではないのではなかろうか。日本人女性はどこまで身の回りの用事の時間を増やし続けるのであろうか。日本人女性は、ここまで身体に磨きをかけ、一体、どうしようというのだろうか。

\* 「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録 2329b 「おしゃれ国ランキング（身の回りの用事時間の国際比較）」
- [2] 図録 7320 「都道府県別の女性おしゃれ努力度」
- [3] 図録 3550 「理容師と美容師の推移と都道府県別美容師密度」